

対談

少子高齢社会に挑む 地域づくりの実践と課題

講師：佐藤良子

コーディネーター：長江曜子

<コーディネーター>

ここからは「私も佐藤さんからより深く聞きたい」というような形のトークに入らせていただきます。よろしく申し上げます。

早速、講演が終わった瞬間にも、すぐ質問が出るくらい活発に聞きたいことを聞いていきたいなというふうに思っております。

今日は、佐藤さんから自治会での悩みや苦勞をお話していただきました。人と物と金というのはとても大切な部分で、「人がいない、お金がない、物が無い」ないない尽くしを言うのは簡単なのですが、佐藤さんは全部キチッと調達しています。これまで工夫してやってこられたのはすごいことだなというふうに思います。その中で、最初にお聞きしたいことは「みんなから聞く」ということをすごく大切にされていますよね。実は私、佐藤さんの団地にお伺いした時、「なぜ団地の中で葬儀を始めたのですか」と質問しました。その時「自治会に葬儀費用を借りて来た人がいて、それがきっかけなんです」と言われたことを思い出したのですが。

<佐藤良子先生>

ご両親をいっぺんに亡くした若い息子さんがいたのです。お父さんもお母さんも余り年金がなくて、蓄えがなかったのです。息子さんは「全部分からないからその葬儀屋さんに一任して、その通りにやったら二十何万円のお金が足りなくて払えない」と言って、自治会にお金を借りて来たのです。

でも、「自治会」って銀行ではないし、会則の中にも「借金が出たら貸していい」という名目が無いので、「どうしようか、葬儀に払わないといけないのに」と、役員さんみんなが頭をひねりました。そこで、「ああ、会長が貸してあげればいいんじゃないの」と言われて。自転車ですぐ近くの銀行まで飛ばして、25万円下ろしてその方に貸したのです。

それを聞きつけたもう1つの葬儀が、「足りなくなったら会長が貸してくれるらしい」というので、またもう1件「お金を貸してほしい」と来たのです。「供養のつもりで貸さげよう」ということで貸したのですが、そこで疑問を感じました。なぜ、生きたお金を使わずに死に金を使うのだろう。安くやれる方法は立川にあるはずだと。

そこで、「市民葬」を調べた結果、立川市に斎場があり、そこでシルバー人材センターが葬儀を一気に引き受けてやっているところがありました。

では、シルバー人材センターの葬儀場まで行って一式終わるのにどのくらい掛かるか。これが市でやると15万円掛かるのです。これを、自治会の集会場借りてやったら3万2,000円でできちゃうのです。祭壇が2,500円、棺が1万4,800円、お骨つぼが3,000円、そういう値段が全部葬儀屋さんより詳しくなり、大金を掛けなくてもいいということになりました。



自治会葬では、花や香典返しを20パーセント引きにしています。また、葬儀屋さんが民間にあるのですが、「民間との関わりはどうなるのですか」とよく質問があります。民間とも全てその20パーセント引きでやってもらいます。

例えば会社に勤める人は集会所で集まるのは駄目なので、「葬儀場を借りたい」といいます。借りるのも20パーセント引き、線香やろうそくもみんな20パーセント引きで購入できます。この安さで葬儀があげられるので、自治会の集会場(5カ所)を葬儀場に開放したのです。

けれど、運動等で次に使う人が「線香臭くて参っちゃったよ」と苦情を言うのです。しかし、「それは供養のための線香のにおいだから、手を合わせればいい。あなたたちも救われるよ」と話しました。すると今は、線香のにおいが嫌だっという人は誰もいなくなりました。

ちなみに、葬儀ボランティアさん20人います。

<コーディネーター>

それがすごいですよね、葬儀ボランティアさん。それで、年間35件も葬儀を受けている。

<佐藤良子先生>

そうですね。少ないときで30件。去年多かったですね、38件ぐらいあったと思います。

<コーディネーター>

お坊さんも協定値段が決まっているとお聞きしたのですが。

<佐藤良子先生>

市が6市（東大和、国立、昭島、青梅、武蔵村山、日野市）のお寺と契約してあります。市の斎場の方をお願いしてお坊さんを依頼していただくのです。市ではお通夜と告別式を行い、戒名をもらいます。旅立ちの供養をしていただいて20万円と決まっている。だから葬儀の計算ができるのです。

葬儀の計算ができるっていうことは、一周忌まで供養していくためのお金を残してあげる手だての計算を私がやるのです。葬儀のコーディネーターを全部やりますので依頼が多いです。「家から送りたい、集会場になってもこういうふうに送りたい」と言えば、本当に格安でできます、葬儀の方法全て。

ただし、特別な宗派については請け負いません。それは特別な宗派の方に全て手だてをしていただけるので、会場だけは貸してあげます。



<コーディネーター>

会場って、普段はサークル活動で満杯なんです。ただ、一朝事があった時に、みんなが遠慮して葬儀のために使わせてくださって、なおかつ1日確か自治会の会場費用は1,000円とか。

<佐藤良子先生>

はい、1日1,000円で行い、お通夜と告別式があるので2,000円もらいます。これは光熱費として頂きます。葬儀のために無料駐車場も150台用意してあります。空き地を借りておりまして、駐車場も全て葬儀が優先なので、集会場を使っている「葬儀ができました」と言うとき皆さん快く

明け渡していただけるのです。

<コーディネーター>

何か、旅立ちの最後を聞いてしまったので、子育て支援のほうもお聞かせ願えますか。

<佐藤良子先生>

葬儀も大事なのですが、子育てをするお母さんたちの悩みも多いです。会長になった時（平成11年）、たまたま子どもの虐待がありました。今から15～16年前、2年生と4年生の女の子だったのですが、その時に再婚した家庭がありました。再婚したうちが悪いってわけじゃないのですが、新しくお父さんを迎えたうちに新しい子どもが誕生し、お母さんの連れてきた子どもを邪険にして、お父さんが熱湯を掛けてしまったという、非常に悲しいことがありました。病院に搬送され、3週間の入院が決まったと連絡がきました。退院する日、校長先生と私、それから両親と一緒に迎えに上がりました。そうしたら、その子どもの女の子2人は、お母さんが私の側にいるのに親の所に行かず、「おばちゃん、あのうちには鬼が住んでいるから行きたくない。私たちをどこか姉妹で住まわせてくれるところ見つけてほしい」と言われました。病院から直接児童相談所に電話で話し、すぐ来ていただいたので、そこからすぐ施設に入れていただきました。

こうして「子育て支援を作っていこう」となりました。最初は5人だったのですが、5人に「口が固くて行動的で明るくて。そういう人を1人ずつ連れてきて」と言ったら、みんな1人ずつ連れてきました。気がつくと10人になっていました。「じゃ、今度は10人になったから、もう1人ずつ連れてきて」と、今度はその人たちに親交の厚い、信頼のある人を見つけてもらい、24人で立ち上げました。そこから「ママさんサポートセンター」というものも作りました。また、一時保育や子育てのできない人の相談窓口を開設しました。この子育て支援センターは、国よりも都よりも市よりもいち早く作った子育て支援センターです。

<コーディネーター>

次にお聞かせ願いたいのは、東日本大震災の時に被災者の方を受け入れられた時のことです。受け入れだけでなく、内職的な作業の仕事を取ってきて、しっかりおじいちゃんとかおばあちゃん含めて、被災者の方々が作業しながらお小遣い分を稼ぐという工夫をされていましたね。

<佐藤良子先生>

被災者の方は、最初 200 人以上受け入れました。今はまだ 141 人残っています。でも、大山団地じゃなくて立川市にも入っています。

最初に受け入れたのは、平成 12 年の三宅島の噴火の時でした。その時は約 20 世帯（47～48 人）だったのですが、受け入れた時にどうしたらいいか、何をしたらいいのかわかりませんでした。そこで、被災者の方を一軒一軒訪問し、不足している物はないか尋ねました。毛布や暖房が欲しいと言う要望を聞き、いろんな業者をお願いして 60 件位の支援を受けました。

ところが、東日本大震災はかなりの人数を請け負いました。また避難する際、突然のことだったので何も持っていないのです。この人たちをどのように対処すればよいのか。そこで思いついたのが、リストカードです。B4 の紙に「今何が欲しいですか」「必要な物がありますか」「病気はありますか。それはどんな病気ですか」「病院は何科を受けていましたか」といった質問内容を記し、避難してきた人たち全員に配付しました。これが大成功しました。



次に物品の調達ですが、私は三宅島の人たちを支援していただいた方に、お礼の気持ちとして年賀状を送り、ずっとつないできました。年にたった 1 回のやりとりだったのですが、「今度は 3.11 だよ。また応援しなきゃいけないね」と電話が殺到しました。と同時に、「支援するのだったらいつでも言って」という励ましの言葉を頂き、業者やスーパー等を約 6 時間かけてファックスを流し続けました。すると、2 日後には集会所の前にトラックの行列ができました。食料を入れる集会所と物品（箸や茶椀、鍋等）を入れる集会所の 2 つに分けていただきました。そして、4 日目にして物品を提供することができました。これほど早く取り掛かることができたのは、三宅島での経験と人脈だったなと思っています。



今度は、農家の方から「土をいじらないと気が狂いそうだ」と要望がきました。そこで、農家の方に「畑を使っていない方はいないですか。貸してください」と聞きました。「じゃあ会長が一生懸命支援しているから、ここの畑、使ってもらっていいよ」と言ってくださり、300 坪を借りることができました。また、すぐ野菜が作れるようにとそこを全部耕運機で耕してくれたのです。すると、農家をやっている人以外にも「畑を借りたい」と言うので収穫祭を開催し、とても楽しくやっていました。

また内職として、チョコレート箱を作ってもらいました。ちょうどホワイトデーの時期でしたので、業者が「箱を作るので忙しい」という話を聞き、業者と提携して仕事をいただくことができました。給料は、「円」ではなく、80「銭」と聞いたこともない単位でした。それでも皆で数をこなし、2 万円を稼ぐことができました。この取り組みが被災者の励ましとなりました。

それが終わると、グループ分けをして家を回って売りに行きました。売るのは私なのですが、押し売りのような形で営業したので、「ああ、また売りに来たのね」と言われるほどしつこく行きました。このような形で支援は今も続いています。

すると、被災者の方は、「大山に来て本当によかった」「一生ここに住み続けたい」と言い、市民権を取った方が 4 軒いました。しかし、平成 29 年の 3 月には全て出なさいと通達がきたのです。「ここにずっと住みたいなら、都営住宅を申し込んで住む権利をつかみなさい」と申し込み用紙が回ってきました。ですので、みんなもうしょげています。

<コーディネーター>
ありがとうございます。

<質問者>

松戸市に在住しているものです。こういったお話を各地

でされているかと思うのですが、こういった活動っていうのは、「佐藤さんだからできるんだよ」言われる時があるかと思うのですが、そういう時にどのようなアドバイスをしているかということが1点。

もう1点お聞きしたいのは、佐藤さんがこの自治会活動を始めようと思った何かきっかけ、というか事件があると思うのですが。それが何かというのを知りたい。

その2点を質問いたします。よろしく願いいたします。

<佐藤良子先生>

順不同になりますけれど、最初の話は「なぜ自治会長をやるか」ということです。理由は平成7年に、うちの夫が会計監査をしていました。しかし、たまたま仕事でいなくて、私が代わりに出て行ったのですが、会計監査が杜撰でした。さらに、会計監査を通さないため罵倒されました。「てめえ女の癖に、印鑑押せばいいのに」と言われながら、男の7~8人に囲まれた中で会計監査をした記憶が本当に鮮明に浮かんできます。ですが、そこにはごまかした偽造領収書が山ほどありました。1万7,000円の領収書にゼロが1つ増えて17万円になっていたものや、ゼロが9や6になっているもの等、それらを計算すると百何十万円という損金が出てしまいます。これは見逃すことはできないと思い、「監査は通させない!」と踏ん張りました。



けれども、総会がもう目の前に迫っているので、「じゃあ、私の方から、この収支決算ができてないために総会を1カ月遅れにします」と伝達を出しました。1カ月遅れてもそのお金は戻らなかったの、やんや言われました。自分達が悪いことをしているのにこのおじさん軍団は、頭ごなしにたたきわけです。じゃあ、最後に私も「じゃあいいですよ、そういうふうに関き直るんであれば、私も警察に公金横領で訴えます」と言ったらしよぼんとなっちゃって。「じゃ、どうすればいいの」と言うから、「あなたたち全員辞職してください」と言い首を切りました。

もし最初行ったのがうちの夫だったら、酒にだまされて印鑑を押したんだろうなと思いました。それを踏み切ったおかげで、いいまちができたなと感じています。

しかし、このような事態になってしまったのは役員が悪いわけじゃなく、私たちが無関心であったのが悪いのです。このことを皆さんに知ってもらうべく、またこれからいい自治会を構築するのであれば、無関心じゃなくて関心を持ち、自ら進んで役員をやろうと思い、半分以上の人が立候補をした中、当選しデビューしました。

平成8年、区長に立候補してから「選挙改善法」に取り組みました。『選考員がどういう人を選んでいけばいいか』を目安にしてもらうため「住民投票制」にしたのですが、これが今も続いておりまして。豊富な人材がでて、良い結果に結びついています。立候補もかなりあって、当番が回ってくると「いいよ」と言ってくれます。なので「役員は大変だな」というのはあまり聞かないですね。

また、「私だからできるっていうことだからやってきたんじゃないか」と言いますが、今度は私の代わりに55歳位の男性がなりました。副会長として8年一緒にやってきた人です。3年前から「もうあなたやって。その代わり、女性の副会長入れておくから」と言って、そこから女性が入りました。自治会はうまくいくかいかないかはリーダーにかかっていると思います。リーダーが男性であろうと女性であろうと、やはりやる気がある人にやってもらうというのが一番いいのかな。

次に、全国から講演会の依頼がきていますが、まだ行ってないのは富山と秋田だけです。先月も山口県、福岡県、三重県、愛媛県、埼玉県と歩いてきたのですが、よくその質問があります。自治会の研修会に出向くと、全員男性なのです。私は「女性を自治会の役員に入れるととてもいいですよ、だから、活性化をたくて自治会を盛り上げるんだったら女性を使ってください」と言っています。しかし、ほとんどの自治会は、70以上の男性が自治会長をやっています。しかし、女性を動かすとまちが活性化します。女性はちょっと声が掛かると朝起きてすぐ飛んでいける。仲間意識で飛んで歩けるところがあるので。やはり男女平等の社会ですから、「自治会に女性を半分以上入れてほしいな」という願いはあります。

<コーディネーター>

はい、ありがとうございます。

いつも一般的には、できないことをぶつぶつ言ったり、恨んだり誰かのせいにしてしまうことがあります。しかし、佐藤さんは、「どうしたらできるようになるか」という前向

きな考えで、地域をよく知り、人材を生かし、そしてネットワークを広げて実行する。子育てから、最後のところは旅立ちのお葬式までやってしまうという、大山自治会のお話を伺わせていただきました。すばらしい生きた事例を聞かせていただき、これからのまちづくりの大きなヒントになりました。本当にありがとうございました。